

被災地での義歯補綴治療と栄養・食事情との関係について

著者	川西 克弥, 豊下 祥史, 松原 国男, 會田 英紀, 越野 寿
雑誌名	北海道医療大学歯学雑誌
巻	30
号	2
ページ	176-176
発行年	2011-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00006544/

[最近のトピックス]

被災地での義歯補綴治療と栄養・食事情との関係について

The relation between denture prosthetics treatment and nutrition condition in the Tohoku Earthquake area.

¹⁾川西 克弥, ¹⁾豊下 祥史, ²⁾松原 国男, ¹⁾會田 英紀, ¹⁾越野 寿

1) 北海道医療大学歯学部 口腔機能修復・再建学系 咬合再建補綴学分野
2) 北海道医療大学 歯科内科クリニック 地域支援医療科

本学では2011年3月11日に発生した東日本大震災に際し、厚生労働省および日本歯科医師会の歯科派遣要請依頼を受け、4月11日から5月22日までの全6週にわたり概ね3名1チームの歯科診療チームを宮城県七ヶ浜町、多賀城市、塩釜市、女川町および石巻市雄勝町に派遣した。その後当教室では、被災直後からの避難所における食糧事情の推移や食事面での困り事等について同地域の保健師、看護師、管理栄養士等の協力を得て聞き取り調査を実施し、避難者に対しては歯科医療支援後の義歯の使用状況や摂取可能食品アンケート調査を実施した。今回は歯科医療支援の実績およびこれらの調査結果について報告する。

歯科医療支援活動の全1520件のうち口腔ケアが最も多く全体の71%を占めた。これはライフライン復旧の遅延や飲料水の不足、また口腔衛生用品の不足が顕著であったことなどが大きく影響している。また、主食として米飯以外にパンが毎日1回提供されていたことから、高齢者率が高い避難所において、飲料水が不足した状況下での嚥下障害による誤嚥性肺炎の発生が危惧された。歯科診療371件の内訳においては、義歯補綴関連治療が最も多く32%を占め、次に歯周治療が29%を占めた。さらに義歯補綴治療のうち15%が義歯修理であり、その多くは活動期間の前半に集中し、治療件数は経時的に減少する傾向にあった。

アンケート調査は葉書による郵送形式をとり、その回収率は43.6%と通常のアンケート調査よりは低かったものの、我々が当初予想していたよりも遥かに高かった。男女比は1:1.23で平均年齢は62.1±13.6歳と多くの高齢者から回答が得られた。義歯に関する調査では、義歯を必要とする者が全体の58%を占め、半数以上の回答者が義歯を必要とした。また、摂取可能食品アンケート調査により食品の摂取難易度から咀嚼スコアを算出したところ、対象者全体の咀嚼スコアは87.1%であった。一方、義歯に着目し対象者を分類したところ、義歯が必要ない者(55名)が98.8%、義歯が必要で装着している者(57名)が82.1%、義歯が必要にも拘らず未装着の者

(18名)が67.5%であり、義歯を必要とする者の咀嚼スコアが低いことが明らかとなった(図1)。

さらに、食事情の推移をみると、500名以上の避難者を有する避難所では、被災翌日における摂取カロリー値が約400kcalを下回っており、また被災後2週間が経過した時点においても食事提供は1日2回で合計約1000kcalであり、成人の目標摂取カロリーを大きく下回っていた。一方、避難者が10数名前後の避難所では食糧確保がなされていたことから被災翌日より食事提供がなされており避難所間での食事情に大きな差が生じていた。

被災直後における義歯紛失や義歯破折および義歯不適合による咀嚼スコアの低下は、円滑な咀嚼運動および摂食嚥下機能の低下によるものであったと考えられる。さらに、義歯補綴関連治療の需要状況が多かったことを考慮すると、高齢被災者の咀嚼能力の低下が危惧される状況下でありながら、提供される食事内容が年齢や全身の健康状態を問わず一律であったことは、有病高齢者の栄養状態の低下を招き、更にはストレスや基礎疾患の憎悪をもたらし生命維持を脅かす危険性が示唆される。今後の災害時における災害弱者に対する栄養・食生活支援体制および歯科医療支援との連携が重要な課題の一つとなると考える。

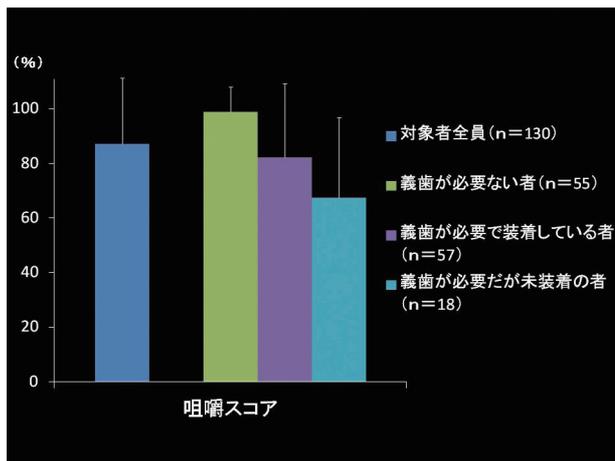


図1. アンケート調査結果より得られた避難者の咀嚼スコア